

目次

田上時子のエッセイ いじめ —おとなが子どもにできること—	1
特集 「感情」—加害者にも被害者にもならないための鍵— 田上時子インタビュー	2~3
活動報告 大阪府のいじめ対応プログラム研修が始まりました メグさんの「性の健康教育ファシリテーター養成講座」を受講して	4
田上時子が大阪府より表彰されました/定例総会報告/エル・コラム①	5
リレーエッセイ 河村朋子/巽真理子	6
講座インフォメーション	7
会員の紹介・入会のおさそい	8
編集後記	8

田上時子のエッセイ

いじめ—おとなが子どもにできること—

「犯罪者のほぼ全員がいじめや虐待の被害体験者」と教えてくれたのは、犯罪者の社会復帰を手伝う心理カウンセラーの友人である。

子どもの虐待に関しては児童虐待防止法案（2000年5月成立）も改正を重ね、被虐待児の後遺症についての理解も深まったように感じるが、いじめについては毎日の報道の割には、調査研究・防止・治療・制度のどの分野の取組みも遅れている。

確かに子ども同士がいじめの実態を把握するのは難しい。

教師やおとなの目の前ではいじめは決して起こらないし、インターネットや携帯電話の出現で、いじめも更に悪質に複雑になっている。

わたしは、「いじめはいけない！」と100回繰り返したところでいじめはなくなると言ってきた。確かに抽象的なメッセージより、ダメなものはダメと、超えてはならない境界線があることを教える必要はあるが、それだけでは不十分で、いじている側もいじめられている側も傍観している側も、じゃあどうすればいいのか、どうすればいじめをストップさせることができるのかということなのだと思う。

わたしは、いじめられる側には何の落ち度も責任もなく、いじめる側が悪いのであり、なぜいじめるのかというのは、生きるため（人間関係を持つ上で）のスキルが不足した結果、自分より弱い者をつくるということだと考えている。

いじめられる側のスキルはただ一つ。嫌なものは嫌だと感じ、はっきりとそれを主張すること。

おとなのわたし達にできることは子どもの力を信じ、その力を補強するために正しい情報とスキルを提供することだ。これをエンパワメント（empowerment）という。

エンパワメントは、同時にいじめる側にも必要である。その内容は、「いじめはいけない！」だけをいう代わりに、気分の鎮め方、協調的な力の使い方、感情を表現するスキルを伝えることなどである。

人はハッピーな（肯定的な感情の）ときには他人を傷つけようとは思わない。肯定的な感情と否定的な感情は同居しない。肯定的な感情はいじめを遠のける。ならば、肯定的な感情をもっともっと感じさせ、表現させることはいじめ防止になろう。

インターネットや携帯電話の特質も教えるという「メディア・リテラシー（読み解き）」もエンパワメントの一つである。

今年度、当NPO法人は、大阪府教育委員会と共同で「いじめNO！宣言 一人ひとりのエンパワメントで ～6つの力と30のプログラム～」を開発した。

いじめ防止に特効薬も万能薬もない。

時間がかかっても、子どもに境界線という概念を伝え、同時に子どもの力を信じて何ができるかを教えることだと考えている。同時におとな側は、いじめが起りにくい「学校・家庭環境」を整える努力も忘れてはならない。